



2014年12月 第12巻第12号

2015年2月の予定

かく語りき—聖人の言葉

「すべての師は一つです。神の同じ力が彼ら全員を通じて働いています」  
(ホーリー・マザー シュリー・サーラダー・デーヴィー)

「わたしは天と地の一切の権限を授かっている」  
(イエス・キリスト 『マタイによる福音書』28章18節)

今月の目次

- ・かく語りき—聖人の言葉
- ・2015年2月の予定
- ・2014年11月の逗子例会  
「神様を探さないで神様を見てください (Do not seek God but see God)」  
スワミー・メーダサーナンダによる講話
- ・忘れられない物語
- ・今月の思想

今月の予定

・誕生日

スワミー・アドブターナンダ  
2月3日(火)  
シュリー・ラーマクリシュナ  
2月20日(金)

・協会の行事

2月のスケジュール

2月7日(土) 14:00~16:00  
東京・インド大使館例会  
※IDカードをお持ちください  
講演: バガヴァッド・ギター (無料)  
場所: インド大使館 : 03-3262-2391  
お問い合わせ: 逗子協会 046-873-0428

2月1日(日)、8日(日)、15日(日)、  
22日(日) 14:00~15:30  
ハタ・ヨーガ・クラス  
場所: 新館アネックス  
\*体験レッスンもできます。  
お問い合わせ: 080-6702-2308 (羽成淳)

2月15日(日) 10:30~16:30  
逗子例会  
講話: スワミー・メーダサーナンダ  
お問い合わせ: 逗子協会 046-873-0428

2月21日(土) 15:15~16:45  
淑徳大学にて講話  
テーマ: スワミー・ヴィヴェーカー  
ナンダと岡倉天心  
詳細: <http://ext.shukutoku.ac.jp/course/detail/2712/>

27日(金)  
ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動  
現地でのお食事配布など。  
お問い合わせ: 佐藤 090-6544-9304

### 3月のスケジュール

3月7日(土) 14:00~16:00  
東京・インド大使館例会  
※IDカードをお持ちください  
講演: バガヴァッド・ギター (無料)  
場所: インド大使館 : 03-3262-2391  
お問い合わせ: 逗子協会 046-873-0428

3月1日(日)、8日(日)、22日(日)、  
29日(日) 14:00~15:30  
ハタ・ヨーガ・クラス  
場所: 新館アネックス  
\*体験レッスンもできます。  
お問い合わせ: 080-6702-2308 (羽成淳)

2月15日(日) 10:30~19:30  
シュリー・ラーマクリシュナ  
生誕祝賀会  
場所: アネックス  
06:00 マンガラ・アラティ、朗誦、  
賛歌  
10:30 礼拝(プージャ),アラティ,  
花奉獻(プspanジャリ)  
13:00 昼食(プラサード)  
14:45 輪読、講話、賛歌、瞑想  
15:45 特別音楽プログラム  
16:30 お茶  
18:00 夕拝、賛歌

21日(土)  
ウパニシャッド スタディークラス  
東京・インド大使館例会 03-3262-2391  
※IDカードをお持ちください  
お問い合わせ: 逗子協会 046-873-0428

27日(金)  
ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動  
現地でのお食事配布など。  
お問い合わせ: 佐藤 090-6544-9304

関西地区講話 13:30~17:00  
場所: 大阪研修センター  
内容: 「バガヴァッド・ギターとウ  
パニシャッドを学ぶ」

皆様のご参加をお待ちしております。

## 2014年11月の返子例会

### 「神様を探さないで神様を見てください (Do not seek God but see God)」 スワミー・メーダサーナンダによる 講話

ブラフマン、神様、神様の化身は、すべてその本性がサチダーナンダ、すなわち絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福であり、どれも同じです。唯一の違いは、有形の神様か無形の神様か、神性が現れているかいないか、超越的か内在的かということです。

ブラフマン、すなわち神様を見ることはできるのでしょうか。神様は経験できる、見ることができる、と説く聖者がいます。サマーディに達し心とハートと魂がブラフマン（アートマン）と合一すると神様を見ることができるのです。例えば、ギャーナ・ヨーガの実践を通じてサマーディでブラフマンと合一したり、バクティ・ヨー他の実践でシヴァやクリシュナ、イエス、ラーマクリシュナを見たりできるのです。これらに関しては文書による証拠があります。では、どうしたら可能になるのでしょうか。

もちろん、シュリー・ラーマクリシュナを写真で見ることができますし、ブッダを仏像で見ることができます。神様の化身を写真や像などで見るとき、その写真や像は生きているのです。シ

ュリー・ラーマクリシュナの御姿が見たいからと言ってベルル・マトに行く必要はありません。写真を見れば、神様が生きていらっしゃる、私たちと一緒にいらっしゃるのだと感じることができるのです。



### 神様はいつもいらっしゃる

神様は遍在です。神様はどこにでもいらっしゃるので、神様の存在を感じるのに写真や像を見ることも必要ではありません。生きとし生けるもの、森羅万象が神様なのです。

知識には、サットワ的知識、ラジャスの知識、タマスの知識の3種類があるという概念が『バガヴァッド・ギーター』の第18章で論じられていますが、神様の存在についてこの3種類の知識から考えてみると面白いでしょう。神様は写真や像の中にだけいらっしゃると考えるのはタマスの知識です。シュリー・ラーマクリシュナが見られるのはこの写真の中だけだ、とか、ブッダ

が見られるのはあのお寺の像の中だけだ、と考えるのはタマスの知識です。これは、神様が遍在であるという霊的真理と矛盾します。

『ウパニシャッド』では、万物はブラフマンであると説いています。『ギーター』の第13章14節にはこう書かれています。

‘Sarvatha pani padam thath,  
Sarvatho akshi siro mukham,  
Sarvatha sruthimalloke,  
Sarvamavriithya thishtahi’

すなわち「あらゆる処にその手や足があり、目も頭も口もそして耳も、宇宙の到る処にもっている。つまり、それ（ブラフマン）は、宇宙全体を覆いつくし、充満している」クリシュナはあらゆる場所に、すべての中にいらっしゃいます。水の中にも、土の中にも、山頂にもいらっしゃいます。また、『ウパニシャッド』には ‘Sarvam khalu idam Brahma’、すなわち「宇宙（創造）という形の中にある多様性はすべて、本質的にブラフマンである」と書かれています。

『シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド』にはこれらの原理が詩で描写されており、ブラフマンの遍在性について次のように書いてあります。「汝は女なり、汝は男なり。汝は少年

なり少女なり。汝は杖に寄りかかって歩く老人なり。様々な姿を取っているのは汝のみなり」また、『イーシャー・ウパニシャッド』の第1節には、

‘Īśāvāsyam idam sarvam, yat kiñca jagatyām jagat’

すなわち「この宇宙の万物は、命あるものもないものも同じく、ブラフマンから生まれた」とあります。聖典には、神様が全能であるという記述にあふれています。イエスは「木を割りなさい。私はそこにいる」とおっしゃいました。預言者ムハンマドは「アッラーの魂はあまねく行き渡っている」とおっしゃいました。

これらの引用からも明かですが、神様は天国の中にだけ見つけられるのではなく、写真や像、寺院や巡礼地にだけ見つけられるものではありません。神様は普遍の存在ですから、全く逆です。

ラジャスの知識では、神様はここかしこに見出すことができるが、ヒンドゥー教の神様、キリスト教の神様は別の神様であると考えます。

では、神様についてのサットワ的知識とは何でしょうか。神様は遍在で、あらゆる所にいらっしゃり、すべては同じ神様が異なる姿で現れているだけだと考えるものです。これが真の知識で

す。

## 神様を探すのをやめて神様を見る

神様はすべての場所にいらっしゃるということが分かれば、すべてが神様であるということになります。ですから、神様を探すのをやめて神様を見ましょう。これは論理的ではないですか。神様がどこにでもいらっしゃりあらゆるものになっていらっしゃるのであれば、目を開いて神様を見ましょう。この論理的な考え方は聖典にも見られませんが、本当にそれを体験できるものなのでしょうか。

シュリー・ラーマクリシュナの生涯を思い起こすと、師はカーリー母神を信仰し、生きた御姿を現してほしいと何度も母神に懇願しました。カーリーは本当にいるのかそれとも想像上の存在に過ぎないのか、石像に過ぎないのか真に存在するのか、知りたかったのです。遂にその願いは叶えられました。しかも、シュリー・ラーマクリシュナが見たカーリー母神は、母神の姿としてだけではありませんでした。母神はドアであり、部屋であり、祭壇であり、礼拝の対象であると同時に礼拝者でもあったのです。

ヒンドゥー教では、家庭でも寺院でも、神様への供物として作った食べ物を神様に捧げる前に人や動物などに少して

もあげることは、冒涇極まりない行為であると見なされます。しかし、神職にあったシュリー・ラーマクリシュナがカーリー寺院にいたとき、聖殿の中に迷い込んだと思われる猫に母神への供物をやっているところを寺院の職員に見られてしまいました。この異様な行為に職員らはひどく腹を立て、寺院の所有者に対し神職の恥ずべき行為について苦情を言いました。シュリー・ラーマクリシュナは後にこのときのことを、猫の中にカーリー母神の生きた存在を見て、供物を母神に捧げたのだとおっしゃいました。神職の行為の真の目的は職員のような普通の人々には到底理解できなかつたため、このような行為に腹を立てたのは無理もありません。

繰り返しになりますが、ギャーナ・ヨーガの見地から言えば、ブラフマンは万物の中にいる、すなわちすべてがブラフマンです。食べ物を食べることに当てはめれば、お皿も食べ物もブラフマン、食べる人もブラフマンです。ラーマクリシュナ僧団では食事の前に、『バガヴァッド・ギーター』の中でこの概念を表している一節を唱える習慣があります。

Om Brahmārpanam Brahma havir,  
Brahmāgnau Brahmanā hutam,  
Brahmaiva tena gantavyam,  
Brahma-karma-samādhinā.

Om śāntih śāntih śāntih.

この詩の意味は、「手、食べ物、人々、食べる行為、消化の火、すべてがブラフマンである」です。これは食事をするときに唱えるのが伝統になっていますが、毎日儀式のように唱えて心の中で思い浮かべるように努めています。

この真理を経験するのはまれである

しかし、スワームイー・ヴィヴェーカーナンダ（スワームージー）のようにこれを本当に経験することは、極めてまれです。これについてある話をしましょう。

あるときシュリー・ラーマクリシュナは、ドッキネッショル寺院内の住居で、聖典に「あらゆるものはブラフマンである」と明言してあると説明されていました。この概念は、たいていの人には理解できません。「すべてが神であるなんて、あり得ません。机は机で、人は人、動物は動物です。おっしゃる意味が分かりません」容貌の美しいものとそうでない者。聖者と罪人。人々の働きや、レベルは様々であるのに、すべてがブラフマンだなんて。無限なる存在のブラフマンが、カップや皿などの陶器のような、時間と空間に限定されるものにどうやってなり得るのか。皆、そう考えます。

スワームージーが米国で大胆にも「私は彼である」と宣言されたとき、このような考えを神への冒涇であると考えた人が数多くいました。信者が自分を神だと宣言するのは非常に良くないことなのですが、スワームージーはよくそうおっしゃいました。神様が自分の中にいらっしゃる、ではなく、私は神である、というのです。神様が私たちの中にいらっしゃると言えば、異を唱える人は少ないでしょうが、「私は神である」というのは全く別です。神様にとって代わる、ということですから、冒涇行為とも言えるうぬぼれです。神様は全知全能、普遍的存在で、天と地を創造されたという考えは広く受け入れられています。が、「私は神である」という考えには気分を害する人もいるでしょう。「あなたは人間に過ぎない」と人々が言うのに対して、スワームージーは言われたのです。「私は神である」

話を戻しましょう。当時若きナレンドラナート（ナレン）であったスワームージーがドッキネッショルを訪ねているときに、シュリー・ラーマクリシュナが「Sarvam khalu idam Brahman（まさに、すべてがブラフマンだ）」とおっしゃるのを耳にしました。スワームージーはすぐさまベランダに出て行きました。そこには、何かと問題の多い人物ハズラが座っていました。ナレンは師の言葉に懐疑的で、大声で言いまし

た。「そんなことがあり得るものか。この水差しは神、カップも神、私たちまでもが神だなんて。これ以上ばかげたことがあるか！」二人は大笑いしました。これを聞いたシュリー・ラーマクリシュナはベランダに出られると、半ば意識のない状態のまま、何を話しているのかと二人に質問されました。そして、シュリー・ラーマクリシュナがナレンに触れられた途端、ナレンの笑いもおしゃべりも止みました。この一触れがナレンを圧倒し、ナレンの人格は完全に変わったのです。

ナレンはすぐにコルコタの自宅へと帰りました。後になってナレンはこのときのことをよく話したのですが、馬車はただの馬車に見えず、人々や建物もただの人や建物には見えなかったそうです。物質でできているものは何もなく、すべてが意識でできていました。馬車は形がありましたが意識でできていました。人や建物も、形はあっても意識でできていたのです。お腹を空かして帰宅したナレンに、母親が食事を出してやりました。食べ物も意識であるのが見えました。想像してみてください。意識でできたカレー、意識でできた豆や米、水も意識。食事を出してくれる母親も意識そのものでした。

ナレンの母親は、息子に何が起きているのか分からず、食べながら寝ているように見える息子を大変心配しました。

死んでしまうのではないかと思ったのです。その後約2週間、ナレンにはあらゆるものが意識でできているのを見続けました。あるとき公園で鉄のフェンスを見ると、フェンスに額をぶつけ始めました。フェンスが鉄でできているのか意識でできているのか確かめようとしたのです。後のスワミー・ヴィヴェーカーナンダは、これは想像ではないことが分かりました。『ウパニシャッド』の言葉である「Sarvam khalu idam Brahman」も想像ではありませんでした。人は、これを実際に経験することができるのだと分かりました。遠い昔の賢者の経験ではなく、現代の、今この瞬間のことだというのが分かったのです。

スワミー・ブラフマーナンダジーは、弟子を指導されていたときに、問題なく瞑想ができるか、何か困ったことはないかとよくお尋ねになりました。あるとき、弟子の一人が答えました。「マハーラージ、問題がないか、困っていないかとマハーラージに聞かれると、自分たちのことを気遣ってくださるのだと知って頑張ろうと思います」とブラフマーナンダジーはこう答えられました。「確かにそう尋ねることもあるが、君たちは皆、神だと感じるときもある。そんなとき、神である君たちを私が指導するなんて、と思うよ」

この概念を表した話があります。ある

信者が、万物はヴィシュヌ、神様だとグルから教わり、それを信じていました。ある日、この信者が自分で食べるパンを作っていると、犬がやって来て、パンを一つくわえて逃げていきました。インドでは、パンを食べるときにはバターを塗る伝統があります。その方が味がよくなるからですが、犬はバターを塗っていないパンを取っていったのです。信者はバターのビンを手を持って犬の後を追いかけてきました。「主よ、お待ちください！そのパンにはまだバターを塗っていないのです。バターを塗らせてください、その方がおいしくなります！」これが信仰です。神様はあらゆる所にいらっしゃいます。神様の絵や像の中だけではなく、四国八十八ヶ所だけではなく、ベナレスやエルサレム、ローマやメッカにだけいらっしゃるのではなく、どこにでもいらっしゃり、万物の中にいらっしゃるのです。

### すべての場所に神聖さを見出す

シュリー・ラーマクリシュナはある歌が大変お好きで、スワミーにその歌を歌うようにとよく頼んでいらっしゃいました。今から、どなたかにその歌の日本語訳を読んでいただきましょう。原語はヒンディー語で非常によい歌詞です。（ここで、例会の参加者が日本語の歌詞を読み始める）

あるものすべてはあなた。  
私はハートをあなたにくっつけた。  
あるものすべてはあなたです。

私はあなたしか見出さない、あなたは  
あるものすべてであられるのだから。  
おお主よ、わがハートの愛人よ。  
あなたはすべてのものの我が家。  
本当にあなたの宿っておられるハート  
があるだろうか。  
あなたはあらゆるハートにお入りにな  
った。  
あるものすべてはあなたです。

賢者であれ、愚者であれ、ヒンドゥー  
であれ、回教徒であれ  
あなたは相手を意のままになさる。  
あるものすべてはあなたです。  
天国にもカーバにも、あなたはどこに  
でもいらっしゃる。  
あなたには皆、頭を下げねばならない。  
あなたはあるものすべてでいらっしゃ  
るのだから。

大地から最高の天まで  
天上界から最も深い地の底まで  
私は目路（めじ）の限りにあなたを見  
る。  
あるものすべてはあなたです。

熟考の末私は理解した。



疑いの余地もなくそれを見た。

あなたに比べうるものは一つも見いだせない。

ジャーファルに、あなたはあるものすべてであられることが示された。

このように考えると、この場所は神聖だがあの場所は違うなどと言うことはできません。あらゆる場所が神聖であり、あらゆる所に神様がいらっしゃるのです。シーク教の開祖グル・ナーナクについて面白い話があります。ある日ナーナクがメッカの巡礼に出ました。カアバの近くまで行くと、疲れを感じたので眠ることにしました。寝ている間に、足がカアバ神殿の方を向いてしまいました。すると、イスラム教の聖職者がこれを見て、足を神聖な場所に向けていると言って激しく怒りました。ナーナクは目を覚ますと、こう言いました。「分かりました。では、私の足を神聖でない場所に向けてください」聖職者はこれを聞くと、相変わらず怒ったまま、ナーナクの足を反対の方向に動かしました。そのとき聖職者には、カアバ神殿もその方向に動いたように見えました。自分は勘違いをしたのかと思って、ナーナクの足を別の方向に向けました。するとまた、カアバ神殿がその方向に動く光景が見えたのです。これは実話です。この話の意味するところは何でしょうか。すべての場所に神様がいらっしゃるって、誰もが神様で

あると言うことです。

スワームージーも経験されて説かれ、聖典にも書いてあるのに、なぜ私たちには理解できないのでしょうか。それは、私たちのハートが純粹でないからです。では、不純とは何でしょうか。不純は、うぬぼれであり、欲望です。不純の源はエゴです。エゴは、「私は肉体だ、私は心だ、私は知性だ」と言い、その結果、有限の私、未熟な私、小さい無知な私になるのです。これがエゴです。エゴを取り除けば、私たちは至る所で神様を経験します。シュリー・ラーマクリシュナがスワームージーに触れたとき、スワームージーのエゴはとても薄かったため、即座に消えたのです。しかし、私たちには分厚いエゴの層があります。神様を見たいのなら、常に神様と真理について考えていなければなりません。神様に集中する訓練をすれば、私たちのエゴは少しずつ消えていきます。

神様を見るために、二つの実践が必要です。エゴを取り除く努力をすることと、神様のことを常に考えることです。そうすれば、最後には誰もが神様であるというビジョンを見ることが出来ます。この人は罪人であるとかあの人は聖者であるなどと考えることはなくなります。誰もがラーマクリシュナであり、誰もがクリシュナ、イエスなのです。

## 明かな矛盾に惑わされない

しかし、日々の生活の中で、すべてのものの中に神様を見るということに矛盾を感じるかもしれません。シュリー・ラーマクリシュナがされた面白い話をしましょう。

ある信者が、すべてのものはブラフマンであるとグルから習いました。ある日、信者は、「危ない！」「狂った象が来るぞ！」「危ない、今すぐ逃げろ！」と言う叫び声を耳にしました。しかし信者は、すべては神様であるというグルの言葉を思い出し、あの象も神様だと考えました。そこで信者は、象の進路に立ちはだかると、聖典の賛歌を歌いながら神に祈り始めました。象は信者を見つけると、鼻を巻き付けてつまみ上げ、投げ飛ばしました。信者はひどい傷を負って意識を失いました。これを聞いたグルは、信者を自分のアシラムに運ばせて、水や牛乳を与えてやりました。信者の意識が回復すると、兄弟弟子が尋ねました。「なぜ逃げなかったのだ。逃げろという声が聞こえなかったのか」信者は弱々しい声で答えました。「すべてはブラフマンだとグルが教えてくださったから逃げなかったのです」これを聞いてグルは言いました。「息子よ、お前の言うことは正しい。だが、なぜあの象だけがブラフマンだと考えたのだ。危ないと言った象遣いもブラフマンだと考えなかったのかね。

あの象遣いは逃げろと警告したのに、お前は聞き入れようとしなかった」

この話にある通り、すべてが神様、誰もが神様ですが、私たちはよく気をつけて識別し、内省しなければなりません。そうでないと、誤った行動を取る可能性があります。シュリー・ラーマクリシュナは水の例えを挙げられました。ヒンドゥー聖典には、すべての水はヴィシュヌ、神であると書いてあります。汚れた水もブラフマンですが、私たちはそれを飲むことはしません。水によって、これは飲料水、これは洗い物用、など違う使い方をします。またシュリー・ラーマクリシュナは、虎もライオンもすべて神様だからと言って、動物園に行つて檻を開けてもらい中に入って虎を抱きしめたりしたら、虎神様に食べられてしまう、ともおっしゃっています。

心を純粹にする努力をし、神様はあらゆる場所にいらっしゃるのだと考えるようにしたら、その結果どうなるのでしょうか。憎しみや怒り、欲望のような悪い感情が取り除かれ、普遍の愛と至福を得られます。あらゆる場所に神様を見ると、至福を感じます。ではどうしたら神様が見えるようになるのでしょうか。まず、神様の存在を信じなければなりません。次に、神様を好きにならなければなりません。そうすれば、神様への愛が育まれ、最後には神

様を見たくくなります。そのレベルになったら、神様を像や寺院の中にだけ見るのではなく、あらゆる場所で見なければなりません。このことを理解してください。スワージーは、「神はあなたの目の前にいる」とおっしゃいました。それを信じて、神様のお世話をしてください。

すなわち、貧しい人々、病気の人々など、すべての人が神様なのです。神様はお寺の像の中にだけいらっしゃるのではなく、あなたの目の前にいらっしゃるのです。南インドにシヴァの大きな寺院がありますが、そこにスワージーの言葉が大きな文字で書かれています。「シヴァ神の像だけを崇拝する人は二番目であり、万人の中にいるシヴァ神を信仰し奉仕する者が一番である。彼らがシヴァ神を最も信仰する者である」これは、シヴァやイエス、ブッダ、シュリー・ラーマクリシュナをお寺の中でだけ礼拝するのは信仰の最高の形ではない、ということと同じ意味です。すべての人、すべての場所に神様を見るのが最高の形です。このように考えて、他者のお世話をしてください。ただお寺に行って神様を礼拝するだけでは十分ではありません。あらゆる人の中に、あらゆる場所に、神様を見てください。そうでないと、あなたの信仰は幼稚園レベルのままです。私たちはそこからさらに進歩する必要があります。

## スワージー・メーダサーナンダ

### 11月各地講話

11月2日 サットサンガ in 山形



11月6日～11日 サットサンガ in 韓国



11月29日 明治大学講話



### 忘れられない物語

#### ハヤブサと枝

昔、ある王様が二羽の見事なハヤブサを贈られた。それは王様がそれまでに見た中で一番素晴らしいハヤブサだった。王様はこの大切なハヤブサを、訓

練のために鷹匠のかしらに預けた。

何か月かたったある日のこと、鷹匠のかしらが、ハヤブサのうち一羽は堂々と空高く舞い上がるが、もう一羽は連れてきた日からずっと同じ枝に止まったままだと報告した。

王様は治療師や魔術師を国のあちこちから呼び寄せてハヤブサを治療させたが、誰もこのハヤブサを飛ばすことはできなかった。

王様は家来たちにもハヤブサを飛ばすよう命じたが、翌日宮殿の窓から見ると、このハヤブサは相変わらず同じ枝に止まっていた。

あらゆることを試したのち、王様は「田舎には誰かこの問題の本質をわかる者がいるかもしれない」とひそかに考え、家来たちに向って「誰か農夫を連れに行ってこい」と大声で命じました。

朝になると、王様は例のハヤブサが宮殿の庭を空高く舞い上がるのを見て非常に喜んだ。そして、家来たちに向って「奇跡を起こした人間を連れてこい」と言った。

家来たちは奇跡を起こした農夫をすぐに見つけ出し、王様の前に連れて来た。王様は「どうやってあのハヤブサ

を飛ばしたのだ」と尋ねた。

農夫はお辞儀をして答えた。「とっても簡単なことです、陛下。あの鳥が止まっている枝を切り落とすだけです」

教訓：

私たちは皆、飛ぶようにできているのです。創造主の子として素晴らしい可能性を実現するために。しかし、私たちはしばしば自分の枝に止まったまま慣れ親しんだものにしがみついています。可能性は限りないのに、私たちの多くはそれを発見できないまま、慣れ親しんで居心地が良くありふれたものに従うのです。ですから、私たちの人生は刺激的でわくわくして充実したものではなく、たいていは平凡なものです。私たちがしがみついている無知という枝を折り、自分自身を解き放って大空を舞う栄光を手にしませう。

—作者不詳

## 今月の思想

「信仰とは、まだ暗さの残る夜明けに光を感じる鳥である。」

(ラビンドラナート・タゴール)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: [info@vedanta.jp](mailto:info@vedanta.jp)